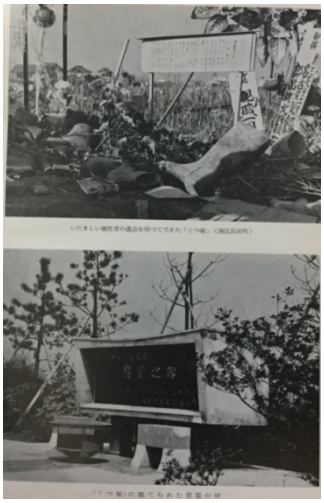
伊勢湾台風「くつ塚」（続）

写真は『伊勢湾台風災害誌』（名古屋市、1961 年）の冒頭に掲載された「くつ塚」だ。9 月 25 日にレポートしたように、今は浜田南公園として整備されている。三輪和雄『海吠える 伊勢湾台風が襲った日』のなかに、「くつ塚」について書かれていたので紹介したい。



大江川の水に沈んだ人の数は 307 人に達していた。生き残った多くの人々は、肉親の誰かを失っていた。10 月 8 日頃から南光中学附近の水が退きはじめ、まずあの大波をかぶった一本道が水から顔を出した。

学校へ避難した人々は、壊れた自宅へ掃除や補修に行くたびに、この浜田町の一本道を通った。道の北側は、高潮にさらされ、渦に巻かれた荒野だった。裂けたシャツやレインコート、つぶれたバッグや風呂敷が、腐った畳や板切れの間に散っていた。黒い大きな長靴や赤や白の小さなゴム長が、水たまりから頭をのぞかせていた。人々は一本道のあちこちに立ちどまり、親や子をしのんで手を合わせた。やがて水が退くと、人々は遺体のあった草むらのなかで、数々の遺品を探しあてた。そこへ線香を立て、花束、菓子、絵本や月光仮面まで添えて、礼拝をくり返すのである。夜の帳が降りて月影が荒野を照らすまで、人々は立ちつくし、うずくまった。哀れをさそうのは数多くの靴だ。泥にまみれ、折れまがり、裂けながら、それを履いていた人の苦悩を物語っていた。

ひとり息子の真を失った下村栄完も、他の多くの人と同じように、追憶の詩情をかき立てられていた。彼はマジックインキでベニヤ板の上に詩を書き、足をつけ、塚の前に立てた。　　ここは冷たい海でした。 波のしぶきと吹く風に、

よろめく足を踏みしめて、　互いに励まし助け合い、

嵐の中に手を取って、頑張り続けたところです。

そしてベニヤ板の裏に、こう書き加えたのである。

〈一日も早く、ここに慰霊碑が建立されることを、望むあまりに〉

ある新聞記者がそこを通りかかって「くつ塚」と名付けた。年が明けると、誰いうとなくそこを「くつ塚」と呼んでいた。昭和 35 年 4 月、152 坪の公園の一隅に御影石の慰霊碑が建った。小林橘川名古屋市長の筆跡で「伊勢湾台風殉難者の碑」と刻まれていた。碑は箱形で、底に 307 人の遺骨ときれいな靴が一足入っている。

（2016 年 10 月 11 日）